

沿岸性重要貝類の資源造成技術開発(バイ)

(増養殖試験研究事業)

道根 淳

1. 研究目的

以前、県内でもまとめて漁獲されていたバイは、漁網防汚剤や船底塗料の主成分である有機スズの影響により雌個体に雄化現象が見られ、正常な生殖行動が行われず、これが一因となり資源が壊滅状態となった。その後、有機スズの使用禁止により、近年、漁場の環境改善がなされ、資源回復の兆しが伺える。そこで、親貝の移植による放流技術開発を行い、資源の早期造成を図ることを検討する。

2. 研究方法

(1) 親貝の移植放流

移植放流に供した親貝は、平成17年4月20、27日に益田市漁協へ水揚げされた天然貝を購入し、全個体に標識を装着したものである。標識には、ディスク型タグならびにプラスチック・チップ(黄色)を用い、接着剤(商品名:アロンアルファ No 232)にて装着した。移植放流は、平成17年6月7～8日に親貝6,968個を多伎地先水深5mの海域へ行った。放流貝の大きさは、殻長30～85mmであった。

(2) 移植放流後の追跡調査

移植放流1、3ヵ月後にかご調査を実施し、親貝の生残状況また分布状況の把握を行った。試験操業に用いた籠は、直径50cm、高さ15cmの三度笠タイプ(目合25mm)を延縄状に連ね、1連50籠とした。籠の中に入れる餌は冷凍イワシを用いた。籠の浸漬時間は12時間とした。

3. 研究結果

移植放流後の追跡試験

放流1ヵ月後(平成17年7月6～7日)の調査において、水深5mラインでは302個の放流バイが採取され、入籠率は46%であった。水深15mラインでは119個の放流バイが採取され、入籠率は30%であった。また、試験操業に使用した漁具(幹綱、籠)で本種卵嚢が確認され、当海域で産卵が行われていると推測された。

放流3ヵ月後(平成17年9月27～29日)の調査において、水深5mラインでは228個の放流バイが採取された。水深15mラインでは422個の放流バイが採取された。水深20mラインでは放流バイ、天然バイともに採取されなかった。

放流当初は、放流地点周辺に多く分布していたことが推測されるが、時間の経過とともに沖合への移動が見られた。